

2015 年度学校評価に関する外部評価報告書

関西大学第一高等学校・第一中学校、関西大学北陽高等学校・北陽中学校、
関西大学高等部・中等部、関西大学初等部、関西大学幼稚園



2016 年 9 月

学校法人関西大学 外部評価委員会

はじめに

2009年度に設置した外部評価委員会は、今年で8年目を迎えた。今回評価いただいた2015年度の学校評価報告書では、よりPDCAサイクルが機能するよう各併設校の報告書の構成を再編した。具体的には、2014年度に追加した重点目標などの設定に加えて、2015年度からは取組計画ごとに定量的な評価指標を各併設校で設定することにより、評価結果の一層の可視化を心がけた。また、外部評価委員会委員の構成に一部変更があり、新たな視点と、これまでの継続的な視点の両面からのご指摘やご意見を頂戴することができた。改めて御礼申し上げたい。

2016年度は本学が130周年を迎える節目の年であることから、今後の20年、つまり150周年を見据えた次期長期ビジョンを策定し、11月4日の創立記念日に公表する予定である。本学の併設校においても、学園のビジョン・政策目標の設定に併せて、「ビジョン・政策目標」として現段階における10年後の構想が取りまとめられている。今後は、学校法人関西大学総体としての「一貫性」と各併設校の「独自性」を踏まえて、掲げた「ビジョン・政策目標」と学校評価との連動を意識した点検・評価活動が求められる。

さて、今年度の外部評価の中で複数の委員からご指摘いただいた点として、「学力向上のための取組」、「自主的な学習習慣」等の項目が挙げられる。次期の学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業改善や各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実施を促進することが検討されている。学力向上のためには、これらの観点も踏まえた教員の資質の向上や、日頃からの保護者への情報発信を通して、一人ひとりの資質や能力にあったきめ細かい指導が求められる。また、生徒に対しても家庭学習を含めた主体的な学習習慣を身につけさせるようしっかりと取り組んでいかなければならない。そのためには、学校・生徒・保護者の三者間の一層緊密な連携が不可欠である。

今年度の外部評価においては、概ね高い評価を頂戴している。しかしながら、併設校全体及び各併設校における個々の課題もご指摘いただいた。改善が求められているものを見直すのは当然であるが、良い評価をいただいたものについてもそれに甘んじることなく、更なる展開・改革に向けた検討を進めていきたい。これからの20年、150周年を見据えて学園全体が発展するように、併設校間での連携だけでなく、大学とのつながりを密にし、より一層教育の質向上・質保証に向けて取組を推進していくことを強く期待する。

2016年9月
学校法人関西大学 外部評価委員会
委員長 永田 眞三郎

I 外部評価実施概要

1 評価日

2016年 4月 1日

2 評価者

外部評価委員 4名

3 評価対象

2015年度学校評価結果

II 総評 外部評価委員からの意見・提言

評価者	A
-----	---

各併設校ともPDCAの循環サイクルを適切に機能させ、長所と課題の確認の上に立って、組織・活動の更なる向上に取り組む姿勢を堅持している点は十分評価に値する。今後とも、いずれの併設校も、改善・向上のための途を自覚的に切り拓くことで、関西大学と共有する価値原理の実現に向け着実に歩を進めることが期待できる。

さて、今日ほど小・中・高・大の一体的な教育改革の必要性が叫ばれた時期はない。学習指導要領の改訂期に差し掛かっていることに加え、「道德の時間」を軸とする道德教育の教育課程上の位置づけに関しても大きな方針変更がなされた(高校レベルでの道德教育の充実化も含め)。またこれまで初等・中等教育で重視されてきた「学力の3要素」の検証は、高・大接続を通して、高等教育にも引き継がれようとしている。更に「教員の資質向上」のための新たな政策展開も企図されている。

各併設校は、こうした大きな制度改正を目前に控え、教員研修の質・量の双方での充実が必要である。その内容は、教育内容・方法に係るものに加え、制度改正の趣旨・内容の理解までも俯瞰した広範なものであることが要請される。同時に、道德教育の指導の在り方やその推進体制について、学校全体の合意のもとに、その実現に向けた具体的施策を打ち出すことが早急に求められている。

評価者	B
-----	---

学校評価が8年目を迎えた本年度から、幼稚園を除いて、報告書がPDCAサイクルを明確に意識した様式に統一されたことに表れているように、当初は顕著であった活動内容の学校間格差もすっかり克服され、極めて完成度の高い自己点検・評価活動が法人内で展開されている。関西大学自己点検・評価委員会の指導力に敬意を表するとともに、法人の方針に対する協力を惜しまない各併設校の組織的努力は、高く評価できる。形式的な整備が進むと、作業が機械的になることが懸念されるが、内部質保証システムを確立し、自己改善能力を向上させるという学校評価の本質を見失わないために、次は、幼稚園の誠実な取組に見られるように、中期行動

計画の実現が重要になる。法人全体で I R などの手法も取り入れながら、法人全体の基本方針を堅持しつつ、各学校・幼稚園の特色を引き出す工夫を重ねて、関西大学の一貫教育の成果の可視化が更に推進されることを期待する。

評価者	C
-----	---

保護者や幼児・児童・生徒のニーズと「教育方針」に基づいた教育諸活動が合致したときに、学校の期待された成果は最大限に引き出される。保護者や幼児・児童・生徒は、入学（園）から卒業（園）まで一貫して単一の同じニーズを持ち続けるとは限らず、その形はその時々で変化することも多い。そのため入学（園）時はもちろん、その後もニーズと「教育方針」に基づいた学校の教育諸活動を合致させ続けることが必要になるのであり、「自己評価」の目的の一つもそこにある。

このたび、評価書を読ませていただき、各併設校ではこの課題を認識し、保護者や幼児・児童・生徒のニーズをとらえること、学校（園）の「教育方針」の理解を形成することに真剣であり、両者を合致させようと尽力されていることがうかがえた。

このようにして公立学校では対応しにくいニーズをつかみそれに応える努力を続けることは、各学校園が更に特徴的で、なくてはならない学校（園）として成長していく道につながることになると思われた。

評価者	D
-----	---

関西大学の各学校は、伝統ある関西大学の一員として、全般的に高い評価を得ており、特に保護者から総じて高い評価を得ている。

もとより改善すべき点もある。学校別に一つずつ挙げるとすれば、第一高等学校・第一中学校では「スローラーナーへの対応」、北陽高等学校・北陽中学校では教職員間における連携の強化、高等部・中学部では教員と生徒・保護者の認識のギャップの解消、初等部では「読書」項目の改善、幼稚園では家庭での安全教育の強化、が指摘される。本年度は更に、一貫教育校であるがゆえに学年進行とともに新たな課題が見えてきた。

いつものことであるが、こうした評価書の常として、優れた点よりも懸念のある点が重点的に指摘される。そのため、評価書だけを読むと評価が低いように思われるかもしれないが、関西大学の各学校の場合にはそれは全く当てはまらない。関西大学の高等学校、中学校、初等部、幼稚園として、共通の理念の下、更に優れた教育を提供されるよう、エールを送りたい。

Ⅲ 学校別 外部評価委員からの意見・提言

1 関西大学第一高等学校・第一中学校

評価者	A
-----	---

予め設定した重点目標について、高校、中学とも、人権教育及び関連の研修会等の若干の項目を除き、ほぼパーフェクトの達成状況を示し得たことは、貴学が教学上の目標の実現に向け、改善・改革の努力を可視化できる形で進めていることの証左であり、十分に評価できる。数値を中心に据えた評価指標の設定も、そうした可視的な評価の推進に貢献し得ている。

貴学に対して抱く「イメージ」や「教育方針への理解」をとりわけ、高校生徒の意識に着目して見ると、徐々にではあるが、これを積極評価する内容にその数値が高められている。このことは、学習に取り組む姿勢や学力向上への教員の期待や熱意が、次第に生徒たちの間に理解され浸透していった証であり、生徒に寄り添った教育展開がなされていることが窺える。

「学力向上のための積極的取り組み」について、中・高のいずれについても保護者の中に消極評価をする者が一定割合を占めている。生徒の側の「学力向上への自覚」については、その実感が乏しい生徒の比率が、中学生徒に比し高校生徒の方が高い点がやや気懸りである。「ゆとりあるバランスの取れた人材を育成する教育」の意義を保護者に理解してもらう努力は必要であるが、このことと併せ、上記のように、生徒たちの間で、教育方針が概ね学年進行に合わせて浸透している事実を踏まえ、確かな学力向上を体感できるような教育上の配慮策を講じることも必要であると思慮する。「工夫された授業や、おもしろい実験」が行われていることを実感している高校生（特に1、2年生）の比率がやや低い点に、この問題の解決策を模索するヒントがあるのかもしれない。

なお、ホームページの活用状況について、保護者の間でその活用が十分でなくその傾向がとりわけ高校生徒の保護者に顕著である。その活用状況の多寡が、貴学の教育活動に及ぼす顕在的、潜在的影響の中身の吟味も含め、この数値のもつ意味について掘り下げて分析する必要があると考える。

評価者	B
-----	---

伝統ある教育理念のもと、見識ある教育方針と教育目標を掲げて、中等教育の使命を踏まえつつ、有名私立大学併設校に対する保護者などの期待にも謙虚に向き合った上で、社会が求める学力を育成することに組織的かつ恒常的に取り組んでいる。本年度から、PDCAサイクルを明確に意識した「今年度の重点目標における取組計画・内容、自己評価及び今後の改善方策」を整備し、従来から丁寧に実施してきたアンケートや学校関係者評価委員会の評価結果と連動させながら、エビデンスに基づく自己点検・評価活動を推進している点は、学校評価の模範例として特筆に値する。

高校の自己評価に比べて、中学校の自己評価が低い目になっているが、評価の根拠を見るか

ぎり、大きな問題は一切なく、低年齢の生徒の指導の難しさを自覚して、自己評価の基準が高い目になっていることが原因のようで、その教育的誠意にむしろ好感を持った。高校・中学が連携して実施している「いじめ問題」対策などは、堅実に実施されており、中高連携も一層緊密になってきて、併設一貫教育の強みが活かされていることが確認できる。教員研修会において、LGBTなどの新たな問題に積極的に取り組んでいることは、公教育機関として高く評価できる。今後も、ヘイトスピーチ対策法に関する対応などに前向きに取り組んでいただきたい。

正課外活動に関する自己点検・評価活動が急速に充実したために、正課教育に関する自己点検・評価活動が相対的に停滞している印象を持った。進路指導だけが中等教育の目的ではないことは今さら言うまでもないことだが、「もっと勉強させてほしい」という要望をアンケートで寄せる保護者の期待も、有名私立大学併設校として無視はできない。中学校における2分割授業に関する外国語学部からの審査員の評価結果なども公表し、来年度は、校長が理想とするグローバル人材育成のための教育方針が更に具体化されることを期待する。

評価者	C
-----	---

伝統と実績に裏打ちされているためか安定感のある学校であることがうかがえた。また10の重点目標がバランスよくあげられており、いずれの達成状況も良好である。

重点目標④の「中学生生活指導：生徒指導について」では通学の電車内での生徒のマナーに関する苦情が多かったことがあり、1学期間5件以内にするとという目標をたてて臨んだ1年間であったとのことだが、実際には年間で12件に留まったということで、課題改善力も高いように見受けられた。

アンケートからも、「この学校に入学して良かった」と思う割合が、生徒、保護者ともに9割前後であり、満足度の高さが確認でき、これまでの学校経営が成果を上げていることがうかがえる。

そうした中ですこし目立つのは、中学校において「学力不足生徒へのフォロー」について、生徒に比べて保護者の満足度が十分でないこと、「中高大の連携」について教員の評価と、生徒・保護者の評価に多少のズレがみられることなどが挙げられよう。生徒・保護者の理解が学校の資本であるとすれば、より丁寧に理解を引き出す方針が必要だということになる。

当校では、基本的に安定感のある学校であることを資本にして、新しい試みにも挑んでおられる。たとえば、学校関係者評価委員会の報告に見られるが、商学部（大学）の授業を高校生が受講できるとのことで、大変興味深い。実際に関西大学に進学した際に、受講して得た単位を認定し、卒業単位に組み込むことも可能であるとのことで、進学後は余裕のできた時間を大学でのより高度な学習に活用できるよい案であるように思われる。現状では、高校生が受講しても内容が難しすぎたりすることもあるようだが、大学の講義を受ける力の有無を判断した後に講座を受講できるような仕組みを構築できれば、より実質的な高大連携になり得よう。この他にも、当校の安定感を資本にすれば、さまざまなことができそうである。多忙化を避けつつも、そうした挑戦を今後とも進めていっていただきたい。

評価者	D
-----	---

関西大学第一高等学校・第一中学校に入学したことの満足度は、2015 年度も昨年度と同様に高校生でA・B評価の合計が86%に留まったが、教員・保護者・生徒の多くの対象者で90%を超えている。満足度という重要な項目できわめて高い評価となっている点は注目されることであり、引き続き維持するよう期待したい。ただ、新しい質問事項である入学前のイメージとのギャップについては、教員の期待と生徒の実態とがかなりかけ離れている。これをあまり深刻に受け止める必要はないと考えるが、中学3年生と高校生ではやや顕著であるので、その理由がどこにあるかを検討し、改善に向けた取組はするに値するであろう。

学校運営のうち「私学の独自性」（建学の精神・教育方針の理解）は、毎年指摘してきたように私学にとって生命線である。この項目では、特に伝統ある本校においてはA評価が最も多くなることが期待される。しかし、2015 年度も教員・保護者・生徒ともB評価が50%前後と最も多かった。その中でもA・B評価の合計が90%を超える保護者と、70%～80%程度に留まっている教員・生徒では差が大きい。この数値が少しでも改善されるよう、引き続き努力していただきたい。

昨年度、評価が分かれた「危機管理」について改善を要望した。2015 年度も教員でA評価が多く保護者・生徒でB評価が多い点は変わらないが、C・D評価はいずれも低くなっている。事柄の重要性に鑑み、引き続き更なる改善に取り組んでいただくよう要望する。

A・B評価の合計がひとつでも70%を得られていない項目は検討の上、必要であれば改善に向けた取組をするべきであると考え。知育の「学力向上のための組織的な取り組み」、「スローラーナーへの対応」、徳育の「社会規範の理解とモラルの醸成」、学校間連携の「進路情報の提供」、カウンセリングの「カウンセリング体制」、教員研修の「教員の研修活動」がこれに該当する。昨年度から解消されていない項目もあるため、引き続き検討し、解消に努められることを期待する。

なお、教員と保護者・生徒の評価の差が顕著な項目として「学習施設・設備」「部活動の施設・設備」がある。この点については、学校法人全体の計画に添って改善すればよいであろう。

以上、課題を抱える項目を中心に述べたが、概して評価結果は高い。関西大学第一高等学校・第一中学校の伝統を更に発展させるため、取組を続けられることを期待する。

2 関西大学北陽高等学校・北陽中学校

評価者	A
-----	---

予め設定した重点目標について、「希望する進路の実現」や「学校の組織力の向上と活性化」に係る目標のうちの一部を除き、満足できる達成状況を示し得ている。「希望する進路の実現」の目標の中でも、顕著な結果が出ているものもある。総じて、「知徳体の調和のとれた人間性の育成」という建学の精神は、重点目標の達成状況を見る限りにおいて、十分具現化されている。なお、そうした目標達成状況を測定するための評価指標も、可視的な評価の推進に貢献し

ている。

さて、教員の「組織面の自己評価」の年次比較を見ると、前年度に比し、全項目について評価値の上昇が認められる。教員の「個人面の自己評価」についても、同様の傾向が見られる。改善が図られた理由として、責任・役割の若手教員への分散、会議数の減少等に加え、教員間の情報共有の徹底化が挙げられている。円滑な意思疎通を基礎とした教員間の連携と協働の確立は、P D C Aの好循環を通じた学校活動の改善・向上のための必須要件である。そうした連携・協働の体制が確立されつつあることを踏まえ、それを更に効果的に機能させることで、学習指導や生徒指導等における学校と家庭の連携等に係る項目において保護者の好感度を今以上に高めることができよう。加えて、各評価項目での中学校保護者の評価値がやや低い数値が散見される状況についても、学校の組織的な連携体制の実が上がる中で、それも徐々に解消されていくのではないかと考える。

上記と関連して、「学力向上への組織的な取組」、「スローラーナーへの対応」への評価が、保護者（とりわけ中学校保護者）の間でやや伸び悩んでいる状況に対しては、これらについての生徒の好感度が増していることとの対比の中で、保護者がこの点について具体的に何を求めているのかを的確に把握し、適切な説明ができるようにしておくべきである。そうした説明ができるようにしておくことで、中学校の部活を充実させるための条件整備も円滑に進めていけるものと思われる。

評価者	B
-----	---

学園生活に対する保護者・生徒の満足度は昨年に引き続き全般に高く、とりわけ3年連続漸減傾向にあった中学校保護者の評価も上昇し、中高一貫教育が順調に軌道に乗りつつあることが確認できる。本年度から、P D C Aサイクルを明確に意識した「今年度の重点目標における取組計画・内容、自己評価及び今後の改善方策」を整備し、当初の試行錯誤を脱却して安定的に運営されているアンケートや学校関係者評価委員会の評価結果と連動させながら、エビデンスに基づく自己点検・評価活動を推進している点は、学校評価の模範例として特筆に値する。

とりわけ重点目標の筆頭項目として、「学ぶ力の向上について」を掲げている点は、生徒の学力向上に責任ある態度で組織的に向き合っていることを示しており、公教育機関として賞賛に値する。自己評価結果の中には、達成状況がまだ十分に進展していない項目も散見されるが、客観的に設定された評価指標に照らして、誠実に自己点検・評価を行うことによって、課題を明確にした上で、具体的な改善方策を策定していることは、自己点検・評価活動のあるべき姿として高く評価する。たとえば、英語教育に関しては、英語4技能試験の活用が高大接続の鍵を握るものとして注目されているが、その達成状況を公表し、教育方法にまで踏み込んだ改善方策を示していることは、昨年度、生徒の英語力向上のために立ち上げた「英語力向上プロジェクト」の成果として敬意を表したい。

有名私立大学併設校の使命を自覚して、重点目標の2番目に「希望する進路の実現について」を掲げ、内部推薦希望者数と進学率を公表し、自己点検・評価の対象とした勇氣にも賞賛を惜

しまない。生徒の学力差を明確に把握し、スローラーナー対策を組織的に推進する方針が明確にされていることにも大いに好感を持った。見識ある取組の内容と成果を保護者に更に積極的に発信することが今後の課題である。

評価者	C
-----	---

4つの重点目標（①学ぶ力の向上、②希望する進路の実現、③生きる力を育み、社会で活躍できる人材の育成、④学校の組織力の向上と活性化）については、知育のみに偏らないバランスの良い重点目標の配置となっている。また、結果を見ても、全般的に成果が上がっていると言えそうである。目標の達成に至らない項目も一部見られるが、改善方策がよく考えられており、次年度での成果に結びつくことが期待される。

4つの中で、特筆すべきなのは、④であろう。そこでは「ア 教員間における連携の強化」及び「イ 会議の有効性を高める」ことが目指されている。目標値に至らなかった項目も見られるが、関連するアンケート結果を見ると「管理職と教員、教員間の連携」や「ミドルマネジメントの組織運営」においては、ここ数年で大幅な活性化が達成されつつあることがわかる。また、「会議の有効性」についても評価が高まっている。これらのデータからは、当校が学校の組織力を大幅に高めつつあることがうかがえた。組織力があらゆる教育活動の資本であることを考えるならば、その効果が今後、他の重点目標へ波及していくことも大いに期待できる。

気になる点は以下の3点である。いずれも昨年度の外部評価でも指摘された点であるが、第一に、中学校に導入される「教科道徳」が、当校の教育目標としても挙げられている「徳育」の中でどのような位置づけになるのか、カリキュラムマネジメント上の整理が必要になろう。徳育は、「教科道徳」の中だけで実践されるものではないが、学校生活のあらゆる場面での徳育の指導が「教科道徳」と連携して効果を上げることができるような仕組みづくりとその意識化が必要になろう。

第二に、高校に比べて中学校の保護者において、「入学させて良かったと思えますか」、「教育方針・教育目標を理解されていますか」、「学力向上のために組織的な取組を行っていると思えますか」の項目でA評価が伸び悩んでいる（あるいは下降傾向にある）ように見えることである。更なる原因の分析と善処を期待したい。

第三に、中学生も高校生も「教育方針・教育目標」の理解に課題があることである。教育が教員と生徒の協働で成し遂げられるものだとなれば、両者のベクトルを合わせる必要があるがその具体的な方策についても今後改善が必要になろう。

評価者	D
-----	---

関西大学北陽高等学校では、本年度、北陽中学1期生が高校3年生になった。ある意味で一つの区切りの年度であったといえる。

2015年度学校評価報告書に関連して、ここでは最初に重点目標の達成度について意見を述べ、次にアンケート結果について意見を述べることとする。

今年度の重点目標について達成状況を見ると、達成（○）が多くある一方で、未達成（△）もかなりある。例えば、中学3年の英検3級80%という目標は70%と未達成であった。同様に、特進・文理の英検2級15%合格、特進・文理の準2級60%合格という目標もわずかではあるが目標に及ばなかった。なお、特進アドバンスは英検2級、準2級とも達成している。学校行事や生徒会活動の活発化、クラブ活動の充実では、保護者はまずまずの評価をしているのに対し、生徒の肯定率は目標値に届かず未達成となった。関西大学への内部推薦の合格率については、高校からの入学生が達成したのに対して、北陽中学出身生徒はやや目標を下回り、未達成となった。この点は、学校側の思いとは別に保護者にとっての関心事であると思われるので、併設校ならではのこの構造的な課題にどう取り組むかが問われているといえる。他方、教員の意識を見てみると、教職員間における連携の強化と会議の有効性を高めるという2つの質問において、教員の個人面では目標を達成しているにもかかわらず、組織面ではなお達成に至っていない。この点は例年通りであるが、経年で見るとかなり改善されている。今後更に教員側の努力で学校の組織力を高め、教育の向上に結びつけていただきたい。

次に、アンケート調査の結果であるが、経年比較を見ると、全般的に、高校保護者、高校生、中学生については総じて右肩上がりの結果を示している。他方、中学保護者については、昨年までの右肩下がり傾向が一部で反転してはいるが、なお低下傾向を示している項目がある。本年度、中学保護者では、アンケートのうち半数を超える項目でC・D評価の合計が30%を超えている。家庭との連携でもC・D評価が多いので、中学保護者との情報共有を更に密にすることが肝要である。

生徒対象アンケートにおいても、中学では、C・D評価で30%を超える項目が高校よりも多い。経年比較では中学の生徒の評価も徐々に上向いている。更なる改善への取組により、今後更に高い評価が得られることを期待する。

3 関西大学高等部・中等部

評価者	A
-----	---

予め設定した重点目標について、その目標は概ね達成されていると理解できるが、自主的に学習する習慣の涵養、規範意識の向上など、学習/教育の重要な側面での課題も明らかとなっている。本達成度評価を通じ、適切な評価指標を基に、当校の特徴と課題を明確化できたことは一定の成果であり、その結果を踏まえて更なる改善・向上に邁進することを期待したい。

学校生活の充実度・満足度が、高等部、中等部の別を問わず、高い数値で推移していることは、当校の校風、学習環境が基本的に受け入れられていることの証左であり、教育方針及びシステムの大枠は引き続き堅持されることを希望する。

さて、学校運営に関しては、会議の有効性、教員間連携、管理職と教員の連携といった項目において、教員による評価が比較的低い数値で推移している。その解決策として、校務分掌を全教員で担うことにより、個々の教員の負担を軽減すること、部長職の新設により責任の所在

と指示系統の明確化を図ること、等が指向されているようである。教員間の意思疎通を図り、連携・協働の体制を確立するとともに、これを組織的、効果的に運用することで様々な課題を解決する糸口が見出せよう。新設の「部長職」が、執行部と教員団の信頼の絆を取り持つ役割を果たすことを期待する。

スローラーナーへの対応について、高等部、中等部における生徒、保護者のいずれも、その改善を求めていることが数値の上から見て取れる。その一方で、報告書の記述を見る限り、成績不振者への教育上の配慮も十全なされているようである。そこで指摘されるように、この問題の根底には、教育指導を通じ、家庭等での自主学習習慣をどう身に付けさせるか、という困難な問題が伏在する。その背景には「私立学校は、公立学校と違い、塾での勉強も肩代わりして行ってくれる」という社会一般の私立学校に対する先入観の存在すら垣間見られる。この問題の解決には多くの困難を伴うことを十分承知しつつも、教員が連携・協働し一丸となって、これまでの取組を継続実施するとともに、学力の3要素のひとつが意図する「自主的に学習に向き合う姿勢」を生徒に対し根気よく育てていくことが求められる。自主学習という態度・志向性は、大学教育を経て社会で生きていくための不可欠の要件でもある。

なお、規範意識の向上や人権意識の高揚は、HRの場等を通じた生徒指導の充実により改善される問題であると同時に、特別活動を含む学校全体で営まれる道徳教育（中等部の場合、「道徳の時間」を軸に）の十全な実施によって解決の端緒を発見できるものと思慮する。

評価者	B
-----	---

昨年度、スーパーグローバルハイスクールに採択されるとともに、初等部1期生が中等部に進学したことを契機として、小中高一貫教育の理念の実現が加速し、最新のICT教育環境を整備しつつ、伝統ある教育理念の現代的具現化に邁進している。本年度から、PDCAサイクルを明確に意識した「今年度の重点目標における取組計画・内容、自己評価及び今後の改善方策」を整備し、既に学内に定着したアンケートや学校関係者評価委員会の評価結果と連動させながら、エビデンスに基づく自己点検・評価活動を推進している点は、学校評価の模範例として特筆に値する。

重点項目として、「一貫教育」の理念を踏まえた上で、「確かな学力を養う」とことと「各自の進路希望を実現させる」ことを筆頭に掲げている点には、有名私立大学併設校としての自覚と自負が明快に示されており、高く評価できる。達成状況がまだ十分に進展していない項目もあるが、見識ある改善方策が示されているので、今後の改善と進展が大いに期待できる。「5教科学力の底上げ」と「家庭学習習慣の定着」という基本を見失わず、アクティブ・ラーニングなどの推進にも特別の配慮をしている点は、「関西大学への推薦にふさわしい人物」の育成を実現するための見識ある方針である。

優れた取組が推進されていることが確認できるが、その方針と実態が保護者に十分に伝わっていないことが残念である。「家庭学習習慣の定着」は、保護者の理解と協力なしには実現できないので、わかりやすい情報発信が喫緊の課題であろう。学校運営に関しては、文部科学省

支援事業に採択された学校の常として、業務の増加と複雑化が懸念されるが、校長のリーダーシップのもと、将来の世代交代に備えた組織改編が実行されたことは、時宜を得た処置として高く評価できる。トップダウンとボトムアップを適切にバランスさせながら、教育の質保証が更に推進されることを期待する。

評価者	C
-----	---

今年度の3つの重点目標(①初中高一貫教育の後半を担い、確かな学力を養うことによって、各自の進路希望を実現させる、②関西大学の併設校出身であることにプライドを持ち、国際的な視野と思考力・探究力を備えた「関西大学への推薦にふさわしい人物」の育成、③初等部から内部進学を円滑に進め、初中高から大学への内部進学指導をより実態に即し充実させる)において、いずれの点においても、充実した取組がみられる。

重点目標①に関しては、「課題→点検→確認テスト」による丁寧な指導の実践がみられるが、一部、「家庭学習習慣の定着」において成果の見られない層があるようである。要求水準が高い側面もあるのかもしれないが、「習慣」の形成は一般に、年を経るにしたがって、難しくなることを考えると、入学後の生徒の習慣づくりとともに、小学校との連携によって将来の生徒に働きかけることも考えられてよいと思われた。重点目標②に関しては、「帰属意識」と「規範意識」の向上が目指されているが、後者で目標値に若干届いていない側面がみられる。また、「先生とのコミュニケーションがとれ、その指導に納得している」の中等部平均が下降しているなどが気になるところである。生徒の参加や自主性を引き出す実践や「先生とのコミュニケーション」は、学校への帰属意識や規範意識の醸成につながる可能性がある。今後も地道な実践の積み上げが期待される場所である。重点目標③に関しては、初中・中高・高大の連携が、行事や学力等の面、そして内部進学の見点から多様になされており、学校間の接続や生徒の進路についての、責任ある実践の様子が見て取れた。

「校長の意見書」には、「昨年度から引き続き多くの項目でプラス評価のポイントが下がってきていること」や「中学1年生の本校の教育方針に対する理解が、例年になくマイナス評価を示した」点についての危惧が記述されている。全体的に、開校間もない学校であること、内部及び外部からの進学者の双方の特質が合わさっていることなどがあり、学年間でのアンケート項目に関する評価が安定しない状況にあるようにも見える。今回の報告書では、昨年の同学年との比較、というかたちでデータがまとめられていることが多かった。学年間の差異の把握とそれへの対処も大切であるが、各学年が年ごとにどのように変化しているのかという同一学年の経年分析も、同様に肝要であると思われた。

評価者	D
-----	---

関西大学高等部・中等部の2015年度学校評価報告書は、丁寧かつ的確に分析・記述がなされており、これに沿って問題点を検討し、対応策を策定していただければいいと思うほどであ

る。以下では、報告書と重複する部分もあるが、第三者として気になる項目について述べる。

まず、学校運営では、教員による「教職員連携」の評価が昨年度に引き続き低く、しかも昨年度より悪化した。次年度から改革が行われるようであるので、成果があることに期待したい。

「教育」に関連して、依然としていくつかの項目で、教員と生徒・保護者の意識のずれが見られる。特に顕著なのが「いじめへの対応」である。この項目に対する教員のC・D評価はゼロであったが、生徒・保護者の回答はかなり高かった。また、「スローラーナーへの対応」でも教員と生徒・保護者とでは違いが見られた。「地域との連携」のように逆のケースもある。こうした認識のギャップは上記以外にも見られるところである。これをどう解釈するか、どう対応するかについての検討が求められる。

本年度の特徴として、中学1年のアンケート結果が理解しづらい点があげられる。「入学生の満足度」では中1は極めて高く、A評価が54.1%と、他学年に見られないほど高い満足度を示している。しかし、個々の評価項目別に見ると、中1の評価が他学年よりかなり低い項目がある。この点は詳しく分析してみるべきであろう。

次に、教育方針・教育目標に対する保護者の評価が高いのに対して、教員と生徒の評価が低いのが気になる。報告書(p.13、3行目)にも記載されているように、「学校の文化はすぐには形成されない」ものである。しかし、明確な建学の精神をもち、すでに学校としての文化をもつ伝統校関西大学の併設校として設立された当校では、少なくとも教員については、この項目でA・B評価の方が多くならなければならないと考える。評価を改善するための取組に強く期待する。

2015年度学校評価報告書のうち、1頁～5頁に掲げられている重点目標については「評価指標」に抽象度の高い表現が用いられている項目が多く含まれていることから、達成状況についてどう理解するかが第三者にはわかりづらかった。

なお、昨年度以前から、私が報告書について要望したことがらについては、翌年度の報告書で適切に対応していただいている。学校当局の姿勢に謝意を表したい。

4 関西大学初等部

評価者	A
-----	---

予め設定した重点目標について、全ての目標がパーフェクトに近いレベルで達成されている。とりわけ、授業研究会が頻繁に開催されるとともに、カリキュラム検討の場が経常的に設けられていることは、各教員の熱意に支えられた授業改善の取組が組織的に行われている証左であり大いに評価できる。アジア各国及びオーストラリアとの教育交流を軸とする「国際理解教育」に向けた取組も斬新であり、十分な評価に値する。いずれの取組も、当校の教育の中軸をなす「思考力の育成」に根差したものであり、将来に亘りより特徴的で充実した展開がなされることを期待する。なお、目標達成状況を測定するための評価指標も、改革指向の評価の推進に貢献し得ている。

アンケートの各項目に対する回答において、教員サイドは慎重かつ客観的に状況の把握・分析を行おうとする姿勢が窺える一方で、教育方針、学力向上に向けた教育活動、生徒指導を含むいずれの項目についても保護者の反応は、常に当校に好意的である。当校の教育改善への努力が、保護者によって支持され評価されている所以であり、今後も引き続きその路線を着実に歩んでいくことが大切である。それは、当校に高い信頼を寄せている児童らの期待に継続的に応えていくための責務でもある。

「中等部進学に向けた適切な情報提供」に係る項目については、保護者の間でやや不十分と捉える割合が多いので、既に構築されている学校と家庭との連携体制の確認の上に立って、内部進学に係る周知策を改めて吟味し効果的に実行することが要請される。

なお、保護者相互の良好な関係を維持することは、開放的な学校づくりを進める上で不可欠であることから、そのために必要な支援策を講じることを切に望みたい。

評価者	B
-----	---

学校に対する保護者の満足度が一般的に非常に高いことからわかるように、小中高一貫教育の柱となる思考力育成を基盤に据えた教育活動が順調に進展している。本年度から、PDCAサイクルを明確に意識した「今年度の重点目標における取組計画・内容、自己評価及び今後の改善方策」を整備し、従来から着実に実施してきたアンケートや学校関係者評価委員会の評価結果と連動させながら、エビデンスに基づく自己点検・評価活動を推進している点は、初等教育における学校評価の模範例として特筆に値する。

文部科学省の全国学力・学習調査における非常に優秀な成績からもわかるように、学力向上に着実な成果を示している点は、公教育機関として高く評価できる。ただし、受験勉強に偏重しない独自の教育理念を掲げる私立学校の特性を更に発展させるために、スローラーナー対策などに関しても、更に組織的な自己点検・評価が期待される。達成状況がまだ十分でない項目についても、全般に誠実な改善方策が示されている。昨年度、対応が遅れていた道徳教育のカリキュラムについても、検討作業が進展しており、新教育課程の準備にも大きな不安はないと判断する。小学校における英語教育の必修化に備えて、これまでの実績を踏まえた先進的な方策を検討し、英語のカリキュラムについても、小中高一貫教育の柱のひとつとして、更に積極的に取り組むことが期待される。

中等部への内部進学者も順調に出している一方、初中連携に関する保護者の評価が低下している点は、有名私立大学の系列校として重く受け止める必要がある。「管理職間の協議の場」を増やすことが今後の改善方策として示されているが、教育内容の発信に関する保護者と教員の評価は、大きく上昇しているため、生徒の進路希望を更に正確に把握した上で、保護者と教員も含めた関係者すべての信頼関係を更に深めていく工夫をすることも効果的であろう。

評価者	C
-----	---

今年度の3つの重点目標（①本校教育の柱である思考力育成の成果を教科学習等だけでなく、児童の生活にも反映させるよう努めること、②良好な校風醸成の基盤となる生活規範、倫理観、人権意識の向上等について全教育活動を通じて推進すること、③安全管理・給食・入学試験・中等部との連携・保護者連携等の学校運営体制を整えること）においては、いずれも達成、あるいは大幅達成とのことで、極めて効果的な学校運営がなされていることがうかがえる。

①においては授業研究の充実、外部講師の招聘、図書館教育、国際理解教育を通じた多様な学習の提供と、その結果としての学力の育成において大きな成果がみとめられる。②においても、いじめや不登校対策、カウンセラーとの連携体制の構築や、縦割り・クラブ・委員会活動をとおした特別活動の推進の多様な展開がみられる。③においても、安心・安全の徹底、出願者増の取組、中等部や大学との連携など、考えられうる限りの取組がなされており、積極的かつ効果的な学校運営がうかがえる。

気になる点は、③に挙げられている中学校との連携である。2015年度は、中等部への入学者を出すようになって2年目であり、開校時に1年生として入学した児童が6年目を迎える初めての年ということもあり、これまでの教育活動の成果がいろいろな点から意識化される時期に差し掛かっている。そうした中で、アンケートの「⑨中等部接続に向けたカリキュラムの作成」においては、先生方がカリキュラムの接続に課題を大きく感じていることがうかがえた。昨今は、公立学校でも、小学校と中学校の9年間を見渡した教育活動が目指されたり、幼稚園も加えた11年間を通した教育が意識化されるようになってきた。それは、各校種のカリキュラムがそこだけで完結するものではなく、その前後のカリキュラムと接続できるような形にしておく必要が意識されるようになってきたためである。今回、報告書を読んだだけでは、当校の先生方がどのような接続上の課題意識をもたれているのかは明らかではなかった。今後は、その課題を明確に意識化し、校内のみならず、中等部とも共有化し、接続の課題を協働で解決していくことが期待される。

評価者	D
-----	---

関西大学初等部において、2015年度は、6年前の開校時に1年生として入学した児童が6年生として卒業した節目の年度となった。

2015年度学校評価報告書によると、まず、重点目標への取組については概ね目標が達成されている。評価指標には定性的なものが多いため、「達成」をどう理解してよいか難しいが、まずは高く評価される。中でも、昨年度に引き続き言及されている研究発表会の成果は注目に値する。参観者の多くから「6年間の育ちは目を見はるばかり」（報告書 p.13、4行目）との感想が寄せられた研究発表会を保護者が見学できないとも書かれている（報告書 p.14、20行目）。提案されているように保護者向けにもビデオ放映が期待される。これなどはホームページ上でも公開できると思われる。

アンケートに目を転じると、教員・保護者とも、ほとんどの項目についてきわめて高い比率

で肯定的回答を示している。初等部教育への真摯な取組、初等部教育への強い信頼を裏付ける数値であると考えられる。そうであるから余計に、いくつかの項目で評価が低いと目立つことになる。教員側では、「中等部接続に向けたカリキュラム作成」「研修を中心とした関西大学との連携」が極端な例で、「中等部進学に向けた適切な情報提供」「初等部一貫の英語カリキュラム作成」も少し要検討である。

アンケートではほとんどの項目で保護者の評価もきわめて高い。その中で、「中等部進学に向けた適切な情報提供」のみ、昨年度に引き続き満足という回答が70%に留まっている。これも教員側の課題と同様に一貫教育に関係する項目である。

児童の評価について本年度は報告書で6年生の数値が示された。「関西大学初等部の児童になってよかったですか」「学校は楽しいですか」という基本的な問いかけに対して、それぞれ99%、97%の児童が肯定的に答えたこと、これら2項目を合わせてアンケートの10項目のうち7項目で90%以上の肯定的回答が得られたことは、高く評価される。

残る3項目のうち、昨年度から引き続き、「たくさん本を読みましたか」は肯定的回答が65%に留まるなど検討を要する評価となり、「勉強をがんばっていますか」「健康に気をつけて生活していますか」は本年度も比較的評価が低く、否定的回答が20%以上となった。他の項目への評価が高いだけに、これらが目立つだけといえなくはないが、注目すべきであろう。

5 関西大学幼稚園

評価者	A
-----	---

本報告書全体を読んで、当園の教育の基本方針である「自主性の陶冶」、「協同性の涵養」、「生きる力の育成」の趣旨・理念を基礎に、室内外の自由遊び、室内外の一斉保育等の各局面で、集団の輪を育みながら、「個」に寄り添った愛情あふれる教育が有為に展開されていることが実感できた。また、上記3本の柱からなる基本方針のそれぞれの中身が明確化されるとともに、それら相互の有機的関連性の確保が自覚的に追求されていることで、当園の教育活動が、個別対応に終始することなく、全体として組織的、系統的に実施されていることも理解できた。

更に、園内での読み聞かせや給食の手伝い等の園内での「学び」が、家庭生活の中で再現されるなど、その教育上の効果が、園と家庭の中で好循環の様相を呈していることも看取できた。このような教育成果が発現している所以も、教師が個々の園児の個性を理解し、上記方針に即した教育的配慮の基でその成長の手助けを行うとともに、園と家庭が連携・協働しその成果を共有し得ている点にあるものと思慮する。今後とも、家庭との意思疎通を密にしながら、個々の園児の健やかな成長・発達に資するような教育展開が継続されることを切に希望する。

当園の活動は多岐に亘るとともに、いずれの活動も充実した内容のものとして行われている。しかしそのために、個々の教員は相当程度の職務上の負担と責任を負っているのではないかと推測する。当園の有為な活動を持続的に進めていくためにも、その活動にゆとりを持たせるような労務管理の方途が模索されることが重要と考える。

なお、関西大学初等部との連携・推進のための活動にも取り組まれている由、今後、その活動がどう実を結んでいくのか注視していきたい。

評価者	B
-----	---

本年度から学校評価活動が8年目を迎え、自己点検・評価もすっかり定着し、充実した報告書が作成されている。評価の分析においては、適切に設定された項目ごとに、行き届いた現状の説明の後、誠実な点検・評価結果を明示した上で、今後の方策が具体的に策定されており、PDCAサイクルに基づく理想的な自己点検・評価活動が実施されている。その成果として、学校評価活動開始以降、唯一の経営上の懸案事項であった一昨年の定員割れも、「2歳児親子教室」の実施などの適切な対応策を迅速に行うことによって、幅広い保護者の理解と信頼を獲得し、昨年度、すみやかに定員充足を実現し、本年度は定員を十分に上回る園児を卒園させるまでに回復している。理想的な内部質保証システムとして高く評価できる。

教育基本法の精神を尊重しつつ、教育学や心理学等の最新知見も参照して、見識ある教育活動を行っていることは、『関西大学幼稚園教育課程』の充実した紙面からも容易に確認できる。その一方、中期行動計画で掲げた「大学との連携活動の推進」にも、関西大学国際部と緊密に連携することによって、外国人留学生との交流を積極的に推進するなど、一貫教育の実質化にも大きな貢献をしている。同じく中期行動計画に掲げられていた「子育て支援策」についても、午前保育後の預かり保育「なないろ」の実施を始めて、好評を得ている点は、保護者のニーズを正確に分析した上での取組であり、誠実な自己点検・評価活動の確かな成果として特筆に価する。

学校評価が比較的なじみにくい幼児教育の分野にもかかわらず、関西大学自己点検・評価委員会の活動をとおして、学内外の模範となる実績を築いてきた組織的努力は、いくら高く評価しても評価しすぎることはない。本年度から、報告書作成にあたって、他の併設校が様式を統一しているので、幼稚園もできる範囲で協力していけば、法人全体の一体感が更に強化されるであろう。

評価者	C
-----	---

創立65年目とのこともあると思われるが、全体的に安定感のある幼稚園であることがうかがえた。また、園長の意見書にもみられるが「めまぐるしく変化する生活ではなく、日々の生活体験を同じように繰り返すことにより、子どもの成長が確かなものになる」といった子どもを育て、教育課程を展開させるための教育哲学がはっきりとしており、説得的であることも安定感を感じさせる理由の一つであろうと思われた。

報告書では、教育活動ごとに、「現状の説明」と「点検・評価と今後の取組」がまとめられており、記載内容もとてもわかりやすかった。特に、「現状の説明」では保育の実態が子どもの具体的な様子とともに記述され、また「点検・評価と今後の取組」でも子どもの様子から、

点検・評価がなされており、日々の子どもの様子が目に見えるようであった。アンケートと組み合わせて、そうした子どもの様子から得られた分析の確認を別の角度からも実施しながら改善が模索されており、独善的にならないよう注意する姿勢にも、好感が持てる。

遊びを核とした保育は、容易には理解されない側面を持つと考えられる。それに対しては、月1回の「クラス懇談会」、年間30回程度発行の「園だより」、年間25回発行の「学年だより」、年間7回発行の「通園だより」、年間6回発行の「食育だより」など、教育活動等への保護者の理解を得る活動が実に活発である。こうした活動には、保護者への啓発の意味も込められていると推察するが、親との協働を創出する上でも効果的であろう。その効果もあってか、保護者による「教育の基本方針」の理解がA・B評価合わせて98.9%という数字を得ていることも、素晴らしい。

2013年度に入園児数の減少がみられたとのことであるが、「遊びませんか？」や「おいで、おいで」「2歳児親子教室」などの、就園年齢に達していない幼児を対象にした働きかけを通して、入園希望者数を増やすことに成功したとの記述がみられ、改善力のある学校組織であることもうかがえた。

評価者	D
-----	---

本年度（2015年度）の関西大学幼稚園の学校評価報告書では、「教育の基本方針」、「教育内容」、「安全教育」、「園児募集」について、「現状の説明」と「点検・評価と今後の取組」が記述されている。これら4項目の評価は、前は3年前（2012年度）に実施された。園長の石倉先生の意見書（報告書 p.23）にも記述されているように、前回明らかになった課題については「速やかに改善策を講じ実践してきた」とされる。その成果は、今回のアンケート結果に見事に反映されている。

「教育の基本方針」の理解度は、前回調査では、保護者の回答のうちAが35.6%、Bが56.9%とBの方が多かったので改善を要望した。幼稚園において真摯に取り組んでいただいた結果、本年度はAが61.0%、Bが37.9%、計98.9%という高い理解度となった。また、教員側では、前回には基本方針を意識して保育している教員の14.3%がBと回答していた。これに対して私はAが100%でなければならないと指摘したが、今回は100%がAと回答しており、飛躍的に改善がみられた。

「教育内容」については、前回同様、全般的に保護者の評価は高く、特に問題点はないと思われる。前回、教員用アンケートでは、「固定遊具」についての指導、「ぬらし絵」「絵本の読み聞かせ」「小鳥・かも・うさぎ当番」の保護者への伝達などでB評価が多かったが、今回はこれらの項目も改善された。その一方で、「子どもの発達段階に合わせた環境設定」「歌の指導」では、多いとはいえませんがB評価が14.3%あった。他の項目が完璧であったので、やや気になる点である。

「安全教育」についても、今回は教員が全員Aと回答した。逆に保護者において「家庭では非常時にどうすればいいかお子さんに伝えてありますか」の項目で19.5%がC・D評価であっ

た。多くはないが、これも他の項目への評価が高いために相対的に気になる項目となった。

「園児募集」においても、幼稚園を取り巻く厳しい環境の中で、適切な努力がなされている。

伝統ある関西大学幼稚園が、今後も理念を高く掲げつつ、時代の要請に適切に対応し、素晴らしい幼稚園教育を提供し続けられることを期待している。

IV 外部評価を受けての学校の所見・改善策等

1 関西大学第一高等学校・第一中学校【学校長名 野木 万也】

8年目を迎えた学校評価（自己点検）に対し、外部評価委員からは概ね高評価をいただけたと感じている。無論、すべてが改善されたわけではなく、経年的に課題として残っている案件もあり、今後も学校を挙げてそれらの課題に取り組み、早期に解決を図りたいと考えている。今回、頂戴した外部評価を受け、学校の所見並びに改善策を述べたい。

まず、各評価委員から「学力向上のための取り組み」について配慮策を講じることを指摘していただいた。確かにアンケート結果を見ても保護者・生徒の満足度が十分高いとは言えない結果となっているのは事実である。本校が関西大学の併設校であり、内部進学制度があるため、生徒の学習に対するモチベーションの若干の低下は否めないが、まずは教員が「わかる授業、工夫された授業」を心がけ、教科学習を充実したものにすることが最優先であると考えている。そのためには、十分な教材研究に加え、外部研修会への参加や教科単位での校内研修等により自己研鑽を重ね、授業能力を向上させることが重要である。また、成績不振者に対するフォローも重要なファクターの一つである。現在、各定期考査後に成績不振者を対象に補習を実施して学力補充に努めているが、今後は教員の自主的な補習も含めた手厚いケアを行っていききたい。更に、家庭学習の習慣化を図り、生徒や保護者の要望に応えていきたい。

また、生徒・保護者のホームページ活用状況についてもご指摘をいただいた。確かに本校のホームページに関しては、常に最新の情報に更新されているわけではなく、長時間を経た記事がそのままになっている部分もある。ホームページはその学校の顔であり、学校の活力を感じさせる面を持っている。本校においても今後は常に新しい情報を発信し、生徒・保護者のみならず、受験生やその保護者にも閲覧していただき、本校の魅力を一層知っていただけるよう改善を図りたい。そのためにも入試広報部と事務室との連携の上、最新のトピックへの更新、記事内容の検討を積極的に行っていかなければならない。

更に、学校施設・設備に関する教員と生徒・保護者の間での満足度の乖離をご指摘いただいた。本校の施設や部活動環境に関する生徒・保護者の満足度は高いのであるが、教員の満足度は生徒・保護者ほど高くはない。生徒・保護者は公立中学・高校を基準に考えているのかもしれないが、教員側の意識には、校舎の老朽化や部活動場所における狭隘感があり、よりよい教育環境での教育をめざす思いがこのような結果に繋がったと思われる。この問題については財政も絡むため、一朝一夕に改善することは難しいかもしれないが、逐次改善を図りたい。

そして、入学前のイメージとのギャップについてもご指摘いただいた。このギャップとは、入学前は大学併設校ならではの自由で開放的なイメージを持っていた生徒が、実際学校生活を始めてみると学習面や生徒指導面で厳しい面があり、少し予想外であったという意味でのギャップであると分析した。特に学年が進むにつれ、中学、高校ともに進学のための勉強に追われるようになるため、上級学年ほどこのギャップの大きさを強く感じるよう

になるのではないかとと思われる。しかし、学校生活が楽しい、入学してよかったというアンケート結果を踏まえると、本校への入学がミスマッチであったと考えている生徒は少ないと思われる。今後は、生徒募集の段階から入学後の具体的な学校生活も伝えながら広報活動を行っていききたい。

2 関西大学北陽高等学校・北陽中学校【学校長名 田中 敦夫】

外部評価委員会のご指摘を踏まえ、今年度は4つの重点目標を掲げ、教育活動を行い、自己評価を行った。外部評価委員会においては、報告書をお読みいただき、多くの意見と提言に感謝申し上げる。様々な意見と提言を真摯に受け止め、改善策を講じ、魅力ある学校にしていきたい。

昨年度は、管理職と教員、教職員同士の連携がなく、組織として機能していないという指摘があったが、今年度は改善され、少しずつではあるが組織が活性化しつつあるというご意見もいただいた。今後も、生徒のため教員のため、何をすべきか、全構成員が考え、実行し、結果を検討し、改善するP D C Aサイクルを推進していきたい。

今年度の指摘は以下のとおりで、その多くが中学校の教育活動である。改善策等を取りまとめた。

(1) 「教育方針・教育目標」について、保護者（とりわけ中学校）においてはA評価が伸び悩み、生徒（中学校、高校とも）の理解にも課題がある。

式典や始業式、終業式だけではなく、体育祭や文化祭、進路説明会など様々な行事に際して、「教育方針、教育目標」について、保護者、生徒に語りかけ、発信していく。また、毎月開かれるP T A実行委員会で、学校の様子を話し、教育目標を伝え、教育方針を理解していただく。

(2) 「学力向上における組織的な取組」「スローラーナーへの対応」への評価が、保護者（とりわけ中学校）の間で伸び悩んでいる。

成績不振者補習、習熟度別授業、長期休暇中の特別授業など様々な取組を行っている（学校評価報告書 p. 13 参照）。今年度、組織的な取組とスローラーナーへの指導により、関西大学へは希望者の90%が合格したことを、進路説明会や懇談会で保護者に周知していきたい。更に、保護者の理解を得るためには、組織的に行う画一的な指導だけでなく、生徒一人ひとりにあった指導を模索していくことが重要だと考える。

(3) 中学校保護者では、家庭との連携でC・D評価が多い。

中学校では、規則正しい生活習慣と学習習慣を身につけさせるために「学習活動ノート」を毎日提出させている。また、このノートは家庭とのコミュニケーションツールとしても活用している。「学習活動ノート」を有効に使い、保護者との連絡を密にして連携を図っていきたい。

(4) 関西大学への内部推薦の合格率について、北陽中学校出身生徒がやや目標を下回った。

内部推薦の合格率が目標を下回ったのは、「スローラーナーへの対応」ができなかったことが主な原因と考えられるため、生徒一人ひとりにあった指導を行い、学力アッ

プを図る。特に、学力差が大きい英語においては、2016年度から中学校の指導法を抜本的に見直し、グループワークや一人学びを取り入れ、達成感、自己肯定感を高める授業を展開する。

(5) 「学校生活の満足度」について、中学の保護者においてはA評価が伸び悩んでいる。

学校関係者評価委員会で、クラブ活動に十分な時間を確保してほしいという意見が出された。概ね満足度は高いが、A評価が伸び悩んでいるのは、上記(2)の指摘の他、クラブ活動の満足度が低いことが挙げられる。放課後、学習、行事の準備を行い、クラブに十分な時間を確保するのは困難な面もあるが、学習、行事の準備を効率的に行い、クラブ活動を活性化していく。

(6) 中学校における「教科道徳」が「徳育」の中でどのような位置づけになるか。

徳育は、「教科道徳」だけではなく、行事、クラブ活動を通して行うことだと考える。2016年度からは、教科書と副教材「13歳からの道徳教科書」を使用して、中学3年間の成長段階を考慮しながら計画的に指導していく。

3 関西大学高等部・中等部【学校長名 鵜飼 昌男】

2015年度の本校教育活動を点検するにあたって、多くのご意見、ご教示をいただき感謝申し上げます。委員からいただいたご意見を参考に、教員間でスピード感をもって課題の改善に努め、初等部から中等部、中等部から高等部、高等部から大学への内部進学者のアドバンテージを生み出す教育活動の構築を進めていきたい。ここでは外部評価でご指摘いただいた、学校運営、保護者とのコミュニケーションの在り方、自主的な学習習慣の検証の3点を中心に、学校の所見を以下に記す。

学校運営に関して、2016年度から校務組織を改編し部長を新設した意図は、所謂「鍋ぶた」組織における分掌主任間の連絡調整を、部長に一定の業務決裁を任せることで業務の効率化、指示系統の明確化を進めることにある。また、間近に迫る教員の世代交代に備えて、担任はいずれかの部の業務も兼任し、分掌業務のノウハウを体得することも今回の組織改編は含んでいる。関西大学の併設校であり内部進学が生徒募集と教育活動に大きく影響を与える本校において、学習指導・進路指導を中心に分掌業務は一般の学校とは異なる要素を内包している。改編の1年目は現場に戸惑いも多いことかと案じるが、一つずつ課題を解決し、次世代育成に益する組織としていきたい。

保護者とのコミュニケーションは、学校の方針を明確に保護者に伝え、学校が求める各学年での到達目標を具体的に示し、保護者に理解を得るためのものである。保護者各位には進級進学にともなって、次第に我が子との距離の取り方を変えていっていただきたいと考えるが、内部進学生が多くを占め教員も中高兼務の場合が多い本校では、ともすれば進学後も保護者は初等部・中等部時代と同じ対応を学校に求めてくる傾向がある。ここに学校評価のマイナスが解消されない一因があり、まずは初等部保護者に対する学校説明の時期と内容から見直し、中等部高等部の教育方針を改めて伝えていきたい。在校生の保護者に対して、担任や学年からの情報発信(学級便りとは別に)を行うために、学校の教育方針と学校が求める各学年での到達目標を各教員が十分に理解する必要がある。また、担任は自分の言葉で保護者に学校を語るができる状態をめざしていきたい。そのためには職員会議等での議論と共通理解が、最も重要となることを管理職として再認識している。

自主的な学習習慣については、進級進学に対する自覚(学習に対する姿勢を変えることが必要性であるという自覚)を、生徒一人ひとりに認識させることが大前提となる。中等部では、授業と課題内容との関係を明確に生徒に示し、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業改善が、生徒の学習意欲や受け身ではない学習への気づきにつながることを期待する。高等部では、進路目標の定め方についての指導を徹底することによって、自主学習の必要性を「認識」から「行動」に移行させたい。学校評価アンケートの前年度比較や経年比較によって生徒の意識変化と学習成績の推移との相関を丁寧に検証していきたい。

4 関西大学初等部【学校長名 田中 達也】

2016年度、初等部では「中等部全学年に初等部生が在籍することを踏まえ、初中連携を一層意識した教育活動の推進」「学習指導要領改訂に向けての国全体の動きを見据えた、今後の教育活動のさらなる充実」をめざし、教職員一丸となって教育にあたっている。

開校から7年。開設準備室時代から初等部の礎を築いてきた初代の教員のうち5名が定年退職等で徐々にぬけており、組織として第2ステージを迎える旨の話は年度当初に教職員にも伝えている。外部評価委員の皆様からのご教示を踏まえ、ご指摘の内容については教職員全員で共有しつつ、改めて初等部の教育の充実・発展を図りたいと考えている。以下、大きく3点に分けて所見及び改善策を述べる。

まず、1点目は、「初中連携」である。ご指摘いただいているように、教員、保護者ともに評価が最も低く、継続的に課題となっている点である。まず、教員については、特に学習指導において、小学校と中学校それぞれの教育文化の隔たりを埋めることが不可欠であると捉えており、現在、重要なキーワードとなっている「アクティブ・ラーニング」について共通理解を深め、授業内容はもちろん、授業方法について検討する場を設けたいと考えている。保護者については、直接の情報発信の機会となる内部進学説明会の内容検討を進め、2016年度5月、6月の実施後には「具体的な中等部生活についてイメージすることができた。」等の声を聞くことができた。今後、上記の学習指導や生徒指導面での初等部、中等部の方針、具体的な内容等について、更なる情報提供に努めたい。

2点目は、「教員の資質向上」である。

冒頭に述べたように、改めて教員全員が教育理念、方針を共通理解し、初等部の教育を確固たるものにしていくことが必要であると考えている。各教員の学習指導、生徒指導、子ども理解等、個々の資質・能力向上のために、これまで継続的に実施してきた校内研修を更に活性化し、活発な論議のもと教育課程の改善にあたりたい。また、保護者への情報発信、日常的な情報交流を通して、きめ細かい指導や密な連携を行い、保護者から信頼される教師力をつけていきたい。

3点目は、「児童アンケートによる評価」である。

読書、学習・健康な生活の意欲について、肯定的評価が低くなる傾向があるが、実際に担当が児童にヒアリングをしてみると、自分なりに把握している課題を真摯に捉え評価を厳しくしている実態も見えた。また、読書については、低中学年の頃と比較すると本を借りる量は減ってはいるが、授業等、学校内で各書籍や資料を活用する機会は大幅に増えているので、アンケート項目の設問内容・方法について、再度検討を行い、児童の学校生活の状況、成果・課題がより見えやすくなるようにしていきたい。

以上、3点について述べたが、この他の課題についても常に学校全体で共有し、ミューズキャンパス全体の教育目標になっている『高い人間力』の基礎を培うための取組を推進していきたい。

5 関西大学幼稚園【園長名 石倉 千世】

外部評価委員から多くのご意見・ご教示をいただき感謝申し上げますと共に、ご指摘の内容については教職員全員で共有し、教育活動に活かしていきたいと考えている。

まず、「安全教育」についてである。保護者のアンケートにおいて、「家庭では非常時にどうすればいいかお子さんに伝えてありますか」という項目で、C・D評価が19.5%であることに注目すべきとご指摘いただいた。非常事態に対する保護者の意識を徹底させるにあたっては、日常生活における危険予知に対する指導に力を注ぐことで、家庭での安全教育の強化に繋がるよう努めたい。

次に、やや気になる点として、教員のアンケート結果について、「子どもの発達段階に合わせて興味関心を意識した環境設定を心がけていますか」と「歌はピアノや教師や友だちの声に合わせて歌うことを意識して指導していますか」の項目にB評価が14.3%あったことを挙げられている。この点については、年度の初めに全教員で保育室の環境設定を確認する際、子どもの発達段階に即した角度からの意見を出し合うことで共通理解を深め、歌に関しては各学年会議で確認することを徹底したい。

また、前年度と同様、本園の教育活動を評価していただく一方で、労務管理についてのご示唆も頂戴している。これまでの園運営において教員の構成メンバーに大きな変動がなく、教育方針の共通理解の徹底がなされたことで、“全体的に安定感のある幼稚園”と感じて頂けたことを励みとして、今後も守りたい本園の“教育哲学”を教員が理解し、やるべきことを最優先できる現状を保持することで、余分な負担にならないよう注意を払いたい。しかし、子育て支援における預かり保育を拡大させていく上での課題はある。預かり保育担当者を別途雇用しているが、クラス担任教員による参加園児の把握や諸手続き等事務的な仕事が増していることは否めない。更に、クラス担任教員と預かり保育担当者との綿密な報告・連絡・相談は、子どもひとり一人の理解を深めるうえで欠くことはできないので、時間的な問題を含め負荷にならないよう十二分に考慮しながら園運営に努めたい。

今回、外部評価委員から「遊びを核とした保育は、容易には理解されない側面を持つと考えられる。」というご意見を頂戴した。それに対する本園の教育活動を理解し、評価して頂いたことは大きな励みとなったが、同時に、本園の教育活動のあり方は“容易に理解されない難しい保育”であることを再認識する思いである。とはいえ、この保育の実践こそが子どもの幸せな成長を願う本園の理想である。これを掲げ、実現に向けて邁進しているからこそ学校評価にあたっては、全教員が現場での実践に大いに役立つための点検とし、積極的かつ前向きに受け止めている。改善策への取組が、教員にとって精神的にも肉体的にも過重なものにならないよう進めていきたい。

最後になるが、本年度から本園以外の併設校は報告書の様式を統一している。これまでの本園における報告書の特色を残しつつ、今後は様式を統一することも検討していきたい。

参 考

外部評価委員会規程

制定 平成21年1月29日

(設置)

第1条 学校法人関西大学における自己点検・評価活動の客観性・公平性を担保し、教育研究水準の更なる向上を図るため、学外有識者による評価を行い、その意見を自己点検・評価活動に反映させることを目的として、外部評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(構成)

第2条 委員会は、次の者をもって構成する。

- (1) 常任理事会が指名する常勤の役員
- (2) 理事長が委嘱する学外有識者 5名程度

(委員長)

第3条 委員会に、委員長を置く。

2 委員長は、委員会を代表し、その業務を統括する。

(委員長の選任)

第4条 委員長は、第2条第1号に規定する常勤の役員のうちから委員会において選出する。

(委員の任期)

第5条 第2条第1号の委員の任期は、役職在任中とする。

- 2 第2条第2号の委員の任期は3年とする。ただし、再任を妨げない。
- 3 前項の委員に欠員が生じたときは、補充しなければならない。この場合において、その任期は、前任者の残任期間とする。

(職掌事項)

第6条 委員会は、学校法人関西大学自己点検・評価委員会が行う自己点検・評価活動に関する評価を行う。

2 委員会は、前項の評価の結果を学校法人関西大学自己点検・評価委員会に報告する。

(運営方法)

第7条 委員会は、委員長が必要と認めたとき又は委員3名以上の要求があったとき委員長が招集する。

- 2 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、議事は、出席者の過半数の同意をもって決する。
- 3 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求めることができる。
- 4 委員会は、審議のため必要があるときは、関係部署に対して資料の提出を求めることができる。

(事務)

第8条 委員会の事務は、企画管理課が行う。

(補則)

第9条 このほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会の議を経て定める。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

附 則

この規程（改正）は、平成22年4月1日から施行する。

附 則

この規程（改正）は、平成24年11月22日から施行し、平成24年10月1日から適用する。

附 則

この規程（改正）は、平成25年10月1日から施行する。

附 則

この規程（改正）は、平成26年4月1日から施行する。